
守剣

goohon

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

守剣

【Nコード】

N3830V

【作者名】

g o o h o n

【あらすじ】

大切な人を守るために剣をふるうのか？
強くて弱い心太と美津の物語。

夏の日

時は泰平の世、徳川の時代……摂津国嶋下郡（現在の大阪府茨木市）北部の山間の農村地帯。

まだ夏の日差しが照りつける昼下がり。

蝉の声がやかましく、蒸しかえるように暑い。

そんなうだるような暑さの中を、12歳になったばかりの美津は、大粒の汗を額に光らせながら、大切そうに弁当を持ち、小走りに父の待つ畑へと急いでいた。

「おう みつちゃん。今日もあついなあ」

顔見知りの村人が声をかけるたびに、つつい立ち止り、笑顔を浮かべながら、立ち話に没頭したりしていた。

「あかんあかん。はよおつとくに弁当届けたらな」

気づけば時間はとうに、昼を過ぎている。

「ほんならまた……さいなら」

美津は村人にペコつとお辞儀をして、いそいそとまた父の待つ畑へと向かって歩き始めた。

美津の実家は、小さな部落の庄屋の一つであった。

庄屋と言っても山里の村落の話である……生活が豊かというわけではなく、平時は農民とさほど変わらない。

美津の父平蔵は今、新たな用水路の普請を請け負い、指揮を命じられている。

いつも昼休みには下働きに駆り出されている農民と、昼食をとることを日課としていた。

そこに愛娘が弁当を届けてくれる……平蔵の何よりの楽しみである。

田舎の村落の者にとっても、この村の代表者の娘は、かけがえない大切な宝物のようであった。

そういつた人々の暖かいまなざし、やわらかい温もりを知らず知らずに肌で感じながら、美津は伸び伸びと、明るい少女へと育ってきた。

この頃の農民にある娯楽といえば、上方の風聞を着に、酒を飲むくらいしか楽しみのない時代である。

子に与える土地はなく、日ごと食うものにもことを欠き、次男、三男は奉公に出すしか生きる術はなく、日中は水ばかりを飲んで、腹を膨らませていた。

年々、年貢の取り立ては厳しくなり、世間は一昨年 of 黒船来航に境に慌ただしく、開国だの攘夷だのと騒ぎ立てて、ますます物騒だ、と行脚などは口々に噂をばらまいていた。

しかし美津にとっては、遠くの異国の話のように思えて、まるで関心がなかった。

意味もよく解らないまま、愛想よく相づちをうち、ころ合いを見計らって、思い出したかのように慌ただしく父の待つ、畑へと向かう。それが美津の日常であった。

しばらくあぜ道を行くと、左手に佐保川が流れている。

弁当を届けた帰りに、夕餉の食材調達のため、平蔵とよく釣りをする溪流。

この川の流れの速さが、美津にとっては何かとても恐ろしいものに思えて、幼いころはよく平蔵にしがみつき、釣りの邪魔をしていた場所。

その川辺の大きな岩の上に一人……しゃがみこんで水面を眺める、少年の背中が見えた。

「ふう……またや……」

美津は小さくつぶやいて、胸一杯に空気を吸い込んで、大声で叫んだ。

「こらあ！心太ー！！そんなとこでまたさぼってー！！」

美津のよく通る声に、心太と呼ばれた少年の背中、少しだけ反

応したが、振り向くことはしなかった……じつと川面を眺めている。ツギハギだらけの服は水面の反射でキラキラと輝き、少年の横顔を照らしている。

「しょうがないなあ」

美津はため息交じりにつぶやいて、少年の方へと歩みを変えた。

心太はまだしょんぼりと川を見つめていた。

「なにやつとんの？」

わざと軽く問いかけてみた。

心太はうつむいたまま水面から視線を移そうとはしない。

よくみると服のあちこちに穴が開いていた。

首筋には引つ搔かれた跡が痛々しく、少し血が滲んでいた。

「また、惣介たちにいじめられたんかあ？」

美津は少しあきれた口調でまた問いかけた。

心太は今度は力強く首を横に振った。

「そやつたらどないしたんよ？その服……」

少しずつ美津の口調が変わる。

さっきまでの可愛らしい少女の顔は影を潜め、まるで少年の母親のように厳しく、包み込むような口調へと。

少年は立ち上がって、ようやく美津を見た。

年端は同じ……背丈は危うく美津のほうが高いくらいであった。

それは決して美津の身長が、飛びぬけて高いというわけではなく、心太が小さいのだ。

顔は美津に勝るとも劣らない、可愛らしい目鼻立ち。

その眼は黒目がちなが切れ長で、笑うと人の心に染み入るような魅力を中心太はもっていた。

昔から二人で歩いていると、よく姉妹に間違われたりもした。

その度、美津は、

「心太は男の子や！！」

とからかう大人や、友人からかばってあげたものだった。

そんな時でも心太はニコニコ笑って、気にするそぶりも見せなか

った。

「また剣術の稽古さばとったんやる？」

美津は今度は弟を諭すような口調で、また心太に問うた。

「ちやう……ホンマにサボっとたんとちやうねん。フクロウの巣が、朝見たら落ちとったから、直しに来てん」

もじもじ、ぼそぼそと話す心太の表情は、どうみても母親に、いたずらを怒られている子供のようであった。

「抜け出してやる？」

冷たく美津が突き放す。

そう言いながら美津は、思い出していた。

最近、稽古帰りに心太が一人でこそこそ、稽古生の輪から抜け出し、この川辺に向かっていくことを。

心太は優しすぎるのだ……男は強くないと駄目だ……父平蔵からそう教わった。

目の前にいるこの少年は、平蔵の言う男性像とはかけ離れているように美津には思えた。

ニコツと笑ってごまかす心太の笑顔に、またはぐらかされる。

ホントに心からの透き通った笑顔。

美津はため息をひとつついた。

「んでなんでそんなにボロボロなん？」

「フクロウのおとなに襲われてん。おいらが雛を奪うおもたんやるなあ」

どこか淋しそうに心太は、足元にあった石ころを、溪流へとひとつ投げながら答えた。

「そんで？」

また心太のペースだ……つい聞いてしまう。

それは弟を心配する姉の心境なのか……それとも好意を抱く異性への興味心なのか。

おそらく今の美津の心境は、前者なのであろう。

「雛拾うて、木の峰に引っかけといたんやけどな。そんな時に襲われ

てん」

「ふうん」

「んでフクロウはそこ……」

心太の指差した先に、こちらをにらみ威嚇するフクロウのおとなが見える。

「仕返しにうちが石でも投げたるか？」

美津は威勢よく立ちあがった。

けれど心太は一言……

「やめときい」

と、美津のほうも見ず、また川に石を投げた。

「なんで？ やり返さな。人様をなめたら痛い目に会うの分からせよや」

わざといじめっ子のような口調で美津が言った時だった。

今まで子供のようにいじけていた心太が珍しく、静かにけれど力強い口調で

「強いものが、弱いものにわざわざ力を見せつけ、己を必用に誇示し、苛め抜くのがこの世の習い。だがお前は弱きものを助け、強き者に屈するな。それにはまず己が強くなれ」

「これおつとうから聞かされた言葉や…… よう意味分からんけどな。おいらはみんな仲良く笑えたらそれでええねんけどな。たぶん今は、フクロウが弱いもんやと思うから…… やめときい」

「やられといてなにが弱きもんや……」

ぶつくさと呟きながら、美津は心太を見つめた。

「でも一つ分かるんはな、強なかったら、自分よりも弱いもんとか、大切なもんまた守られんへから。おいら弱い人を守るために剣術習うねん」

「またつて…… 心太まだあの事……」

美津の心によみがえる忌まわしき過去。

それを振り払うように美津は言葉を発した。

「なら心太、今よりずっと強なって、うちを守ってくれるんか？」

美津は、不安を言葉に変えていた。

その時の心太は、今までに見たことのないくらい弾けた笑顔で、
「そんな時は一緒に逃げようや」

そう言いながら、

「くつくく……俺怖いの嫌いやし」

と、笑って立ち上がった。

いつもの心太の笑顔に美津はほっとしたと同時に、少し火照った自分が急に恥ずかしくなった。

12歳の子供……異性を気にし始めるには少し早い。

そんなことは二人にはわからない。

「アホ!!」

美津は心太を叩きながら、

「意気地なし!」

思いつく罵声を恥ずかしさを紛らわせるかのように叫ぶ美津……
逃げる心太。

顔を赤らめながら美津は、逃げる心太の背中を追いまわしながら、
どんとどんと叩いていた。

「美津!! 痛いわ!」弾みながら逃げ回る心太を、裾をまくって追
いかける美津。

「逃げるな! 弱虫!!」

二人で喚きながら、走り回っている時だった。

ちょうど通りかかった50がらみの爺様が声をかけた。

「美津さま。お父上が心配されておったでな。そんなところで、は
したなく心太と道草食つたらあかんえ。腹がすきすぎて、お父上
のお腹がのうなっしてしまいますけえの。心太もサボつとらんで稽古
に行きやあ」

心太の祖父、嘉平であつた。

心太は嘉平によく似ていた。

大らかでいつもニコニコとしている。

誰にも分け隔てなく接し、心太の幼馴染で庄屋の娘、美津にも優

しく、温もりを伝えてくれる。

もちろん怒鳴ったところも見たことはなく、美津には想像することすらできない。

心太と違うのは、背丈が6尺近くもあること、畑作業で鍛えた肉体、日に焼けた真黒な肌。

昔はかなりの強者だったといううわさも耳にする。

美津の父、平蔵の言う男像そのもののように美津には思えた。

村の悪ガキどもも嘉平の前では、やけにみなおとなしい。

「あつ。爺様。そや。弁当や。はよ持っていかな」

美津は、嘉平の一言にやっと思いい出し、慌ただしく身支度を整えて、急ぎ足でまたあぜ道へと戻った。

「心太！帰りにまた魚釣りにそこに戻るから。それまでに魚採つていてや」

足早に振り返りながら、叫んだ。

そして気づけばすたすたと駆け足で去って行った。

いつもの表情の美津に戻って。

「あら……行つてしもた」

茫然と美津を見送る心太。

「稽古に戻れ言つたわしの立場がないのう」

そう嘉平は苦笑しながら、心太に、

「心太。どないするやのう？」

「約束は守らんなあ」

そう独り言を言いながら、心太のそばに腰を下ろした。

「稽古嫌いななかあ？」嘉平は心太にそう聞いた。

心太は川面を見つめながら

「嫌いやないよ。俺強いねんで。もうおつとうとか大事なもんなくはないし」

心太は頬を膨らませながら、拗ねたような口調で呟いた。

「ほいじゃたら美津さまにも強いとこ見せたらな」

嘉平の言葉が終らないうちに心太はひょいと立ちあがった。

そして川辺にそこら辺の石ころを丸く積み上げ、人工のいけすを作り始めた。

「よし！でけた」

嘉平が見ても清々しい透き通った笑顔でそう言つと、河の中ほどまで静かに入つて行つた。

「じいちゃああん！」

笑顔でこつちに手を振る心太の姿はどうみても普通の少年……よりも幼く汚れない赤子のようであった。

だが次の瞬間……心太の笑顔が真顔に変わる。

一瞬空気が、時間が止まる。

バシャ！！

一瞬の水しぶきが飛ぶ。

次の瞬間、アマゴが一匹バタバタと心太の右手に掴まれていた。

それを静かに川辺に作つたいけすへ移すと、嬉しそうに

「んじゃ、稽古に行ってくるわ」

と、何事もなかったかのように、びしょびしょの服のまま、あぜ道を先ほどの美津と同じように、足早に道場へと去って行つた。

「1匹じゃ足らんじやろくに……」

嘉平はつぶやいた。

そして再び、心太の作つた人工のいけすのなかを覗き込んだ。

元気に魚が一匹、泳いでいる。

内心、孫の所業に驚きながら、嘉平は釣り糸を垂らしていた……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3830v/>

守剣

2011年11月17日01時54分発行